

## 鹿児島市における幼児期から児童期移行の 音楽プログラムの取り組みⅡ

Music Program for Child Development from Preschool to Elementary School  
in Kagoshima City Ⅱ

新村元植\*・中村礼香\*\*

Genshoku Shimmura, Ayaka Nakamura

鹿児島女子短期大学

抄録：「鹿児島市における幼児期から児童期移行の音楽プログラムの取り組みⅠ」（鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報第28号 2012）では、幼小接続期に起こる「小1プロブレム」軽減を目的に、幼稚園において年長児を対象にリトミックを使用した音楽プログラムを実施した。その結果、この音楽プログラムに対する有効性について、当該幼稚園園児及び教諭の高評価を得た。そこで、この音楽プログラムの有効性を小学校低学年児童でも検証することにした。その結果、小学校低学年児童において幼稚園園児と同様に興味関心を引き出すことができた。このことにより、この音楽プログラムの可能性を確認できた。また、当該幼稚園教諭による音楽プログラムを実施し、汎用性を考察した。

**Key words**：小1プロブレム、音楽プログラム、リトミック

### Ⅰ．はじめに

「鹿児島市における幼児期から児童期移行の音楽プログラムの取り組みⅠ」（鹿児島女子短期大学附属南九州地域科学研究所報第28号 2012）では、所謂「小1プロブレム」について幼小連携の観点から考察した。小学校低学年では、幼稚園の「援助」から小学校の「指導」に転換する際に様々な問題が発生し、児童が指導になじめない場面が発生することがある。鈴木（2010）は「小1プロブレム」が起こりにくい授業とは「喜び」、「期待」、「驚き」、「工夫」が意味する「活動の楽しさがある授業である」としている。前論では、幼児期から児童期の接続に関する諸問題を緩和するための音楽プログラムを作成し実施することにより、その有効性を考察した。本論ではその続編として、鹿児島市内のA小学校とB幼稚園において同様の音楽プログラムを実施することにより、その有効性を探る。

### Ⅱ．目的

幼稚園や保育所の幼児期における「援助」から小学校における「指導」への転換は、様々な問題が発生する。これらの問題は小学校教諭が幼児の実態について理解し、それを基に授業の中で興味関心を引き出す工夫を実践することで緩和される。また、小学校では教科の授業が知識中心に

なり、表現活動が減り、幼児期の「遊び」における実践中心の保育と乖離がある。そこで、幼児期の表現活動を小学校の授業でも実施できる音楽プログラムを開発し、幼小連携に寄与することを目的とする。

### Ⅲ．方法

前論では、「小1プロブレム」における問題解消の1方法として、幼稚園及び小学校で可能なりトミックを使用する音楽プログラムについて、幼小連携の観点から考察した。今回はこの研究課題をさらに考察するために、これらの音楽プログラムを中村が小学校低学年用に改良し、鹿児島市内のA小学校1年生3クラスを対象に実施することにした。さらに、前回鹿児島市内の幼稚園で実施した音楽プログラムを基に幼稚園教諭が効果的に実践できるプログラムとして中村が作成し、実際に幼稚園教諭が保育活動で実践した。

### Ⅳ．小学校における身体表現活動の実践

#### 1. 音楽教育の幼小連携と身体表現活動

文部科学省が平成20年に改訂した小学校学習指導要領第2章第6節の音楽科に関する箇所「指導計画の作成と内容の取り扱い」の中に、「各学年の「A表現」及び「B鑑賞」の指導に当たっては、音楽との一体感を味わい、想像力を

働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること」と記載されている。また、文部科学省発行の「小学校学習指導要領解説音楽編」第4章「指導計画の作成と内容の取扱い」では、「低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に第1学年においては、幼稚園教育における表現に関する内容などとの関連を考慮すること。」と記載されている。このことから、特に小学校低学年の音楽の授業においては、幼児期に行った全身を使った音楽活動を取り入れる授業を展開する必要があると言える。しかし、幼小連携がしっかりと行われていない限り、小学校教諭は児童が幼稚園や保育所でどのような音楽活動を経験してきたのかは知らないであろう。また、今回ご協力いただいた小学校の教諭を含め多くの現場の教諭から、低学年では担任が音楽の授業を行う際、ピアノや歌の力量に差があり、身体表現活動を取り入れたくても取り入れられないということを知った。さらに、音楽教科書を見ても、児童が身体表現をできる題材の内容は少ない。

「鹿児島市における幼児期から児童期移行の音楽プログラムの取り組みⅠ」(2013)において、幼稚園で身体表現音楽活動であるリトミックの実践を行った。本論では、このプログラムを小学校1年生でも利用できるのではないかと考え、A小学校の協力の下、小学校1年生の音楽の授業でリトミック活動を行った。なお、プログラムについては、幼稚園で行ったものから内容を改良し、小学校の音楽教科書や学習指導要領に合わせている。

## 2. A小学校におけるリトミックの実践

中村が考案したプログラムは4つである。その4つの指導案を研究に協力してもらう小学校に提示し、指導案①(表1)と指導案④(表2)を実践することとなった。その理由として、指導案①の「アイアイ」は1年生が幼稚園や保育所で歌ってきていることが多く、また模唱やリズムの模奏など多くのことを1曲の中に取り入れることができる曲であること、指導案④は児童のコミュニケーション能力を高める効用があると考えられ、また拍子についてそれまでの授業の中で教えられたことがあり、児童が理解しやすいと考え、選択した。

この4指導案はすべて、鹿児島市の小学校1年生で採択されている「小学生のおんがく」教育芸術社(2013)に取り上げられている曲を使用している。それは、今回の指導内容が、小学校教諭にとってリトミックが指導しやすく、実際に授業で児童に歌わせる事ができるであろう曲を使用

した。

また、一つの指導案が10分から15分であるために、最後に絵本を使った想像力を高める効果の高いリトミック活動も行い、45分の授業をすべて身体表現活動として行った。授業中の児童は、予想に反して、集中力が途切れることなく全力でこの音楽活動に取り組んでいた。また、その反応は同じ内容のリトミック活動を授業で経験させた短大生と比較すると、明らかにとても良い反応を示してくれた。児童は様々な動植物に全身を使ってなりきったり、動きの動と静、音程の高低、強弱等、中村の想像以上に即時に反応し、違いを聞き分けることができていた。そして、「今度はいつ来るの?」「楽しかった!」という嬉しい反応を示してくれた。担任教諭からは、おそらく体育の時間よりも動いたのではないだろうか、という意見も聞かれた。上記の項では音楽科と生活科の授業の連携を強調していたが、体育科との連携を図り、身体表現活動として行うことの可能性も考えられる。

## 3. A小学校児童の質問紙回答

今回は1年生3クラスに対してそれぞれ1時限45分の研究授業を実施した。研究授業を実施後、各担任により、簡単な授業のアンケートを実施した。以下はその結果である。

〈質問1〉いつもの音楽授業は好きですか。

音楽授業について図1では、1年生全児童85名(男子41名、女子44名)中、「きらい」または「あまり好きではない」と答えた児童は2名であった。その理由として、「鍵盤ハーモニカができない」、「歌が好きではない」であった。大部分の児童は「まあまあ好き」以上であり、音楽授業に対して良い感情を持っている。

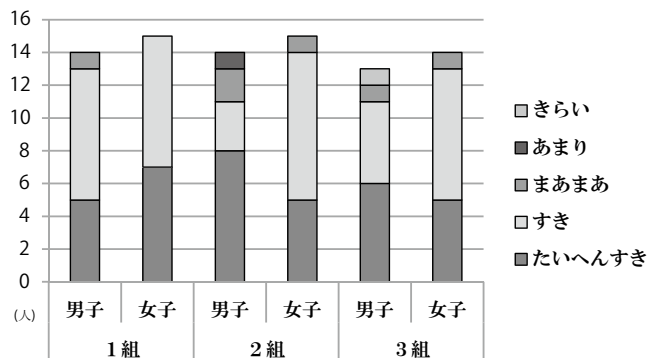


図1. いつもの音楽授業は好きですか。

〈質問2〉今日の音楽は面白かったですか。

図2では、1年生児童全員が面白かったと回答しており、

授業の有効性としての興味関心について、有意な差がある。

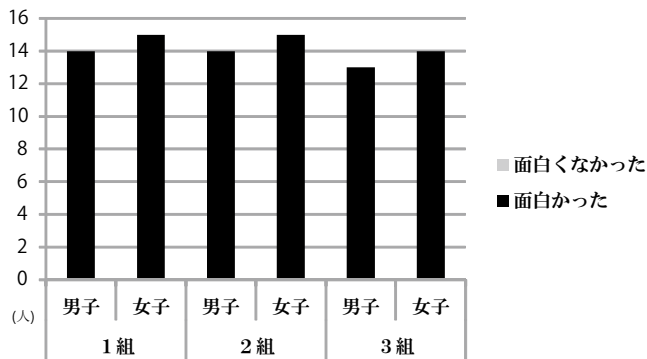


図2. 今日の音楽は面白かったですか。



写真1. A小学校のリトミック風景①

〈質問3〉それはどうしてですか。

図3では、「動き (が面白い)」(32名)、「歌が面白い」(16名)、「楽しい」11名と続き、音楽表現に興味関心があることがわかる。

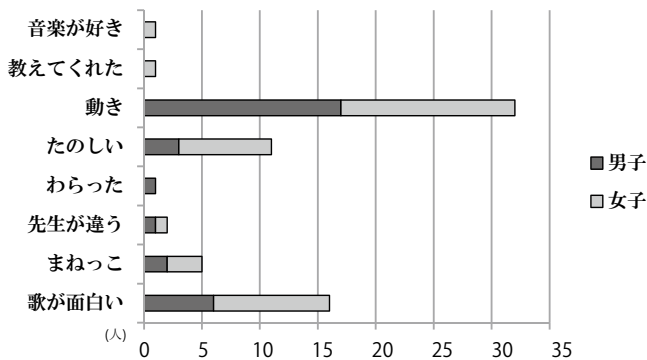


図3. それはどうしてですか。



写真2. A小学校のリトミック風景②

また、本音楽プログラムを実施した1年生担任感想は、以下の通りである。

- 絵本と音楽を組み合わせることで指導したことは興味深かった。象やウサギの感じの違いを聴き分けさせる等、やってみたい。
- 身体表現を取り入れることにより、子どもたちが意欲的に取り組んでいた。子どもたちが意欲的に活動できる授業を実践したいと感じた。
- 絵本を使って、ストーリーに沿って、身体表現することが面白かった。ただし、ピアノの技量がないので、今回の授業はできない。
- 2・3・4拍子のリズム打ちが面白かった。

以上の感想では、研究授業に対して興味関心を示していたが、今後の汎用性に対しては、さらに研究が必要である。

表1. リトミック指導案①

リトミック指導案① 小学校1年生 「アイアイ」		
題材	まねっこしよう	
リトミックの項目	模唱・模奏・強弱・リズム打ち・カノン	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者の動きや歌い方を真似することができる</li> <li>・正しい音程で真似することができる</li> <li>・指導者のリズムを真似して打つことができる</li> <li>・カノンを経験する</li> </ul>	
教材	「アイアイ」 作詞：相田裕美 作曲：宇野誠一郎 4/4 拍子	
活動内容	指導上の留意点	活動のねらい
<p>1. 「アイアイ」を歌う。</p> <p>2. 「アイアイ」の歌詞の箇所を先唱を指導者が、後唱を児童が歌う。その際、児童は指導者の真似をして歌う。(譜例1)</p> <p>3. 「アイアイ」の歌詞の箇所を動きをつけて指導者が先唱したものを児童が真似する。</p> <p>4. 「アイアイ」の箇所を階名で歌い模唱させる。</p> <p>5. 適当なメロディを即興で模唱させる。</p> <p>6. 指導者が4拍子で手拍子で表したリズムを児童が真似する。指導者と児童が交互で途切れないように続ける。最初は四分音符だけの模倣(譜例2)、そしてリズムパターンで模倣する(譜例3)。児童が慣れたら足踏みやステップなどでもリズムを表現する。</p> <p>7. 児童が交互にリズム打ちをできるようにになったら、指導者の手拍子を1小節遅れで真似する。</p>	<p>→ <i>f</i>や<i>p</i>など強弱の変化をつける。</p> <p>→ ピアノ伴奏がないので音程に気をつけて歌う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童が真似しやすい簡単な動作で表現し、強弱と関連した動きをする。また、その動作を終えた場所で止まる。これにより、子どもが動作を記憶しやすい。</li> </ul> <p>→ 手で音程を示す。</p> <p>→ 手で音程を示す。</p> <p>→ さまざまなリズムパターン、強弱、テンポで叩く</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・叩く場所(頭の上、お腹、膝)なども変える。</li> <li>・四分音符を「トン」、八分音符を「ト」と言いながら打たせる。このとき4拍目を、音高を少し高めに、少し強めに言うと児童が1拍目を打ちやすくなる。</li> </ul> <p>→ 児童が真似しやすいように叩く位置を変えるなど視覚的に動作に変化をつける。</p>	<p>→ 強弱に合った歌い方ができるようになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意力を養う。</li> </ul> <p>→ 指導者の動きを模倣する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・短期記憶力を養う。</li> </ul> <p>→ 音階を視覚的に理解する。</p> <p>→ 正しい音程で歌うことができる。</p> <p>→ 様々なリズムパターンがあることを知る。</p> <p>→ アナクルーシスを感じる。</p> <p>→ カノンを経験する。</p>

譜例1 アイアイ 相田裕美作詞 宇野誠一郎作曲

先生 子ども 先生 子ども 一緒に

C Dm G C G

C F G C

F C D G

C Dm G7 C

譜例2 四分音符の模倣

先生 頭 お腹

子ども 頭 お腹

譜例3 リズムパターンの模倣

前 *f* 膝 *p*

前 *f* 膝 *p*

譜例4 カノン

9 肩 前 頭

肩 前 頭

表2. リトミック指導案④

リトミック指導案④ 小学校1年生「さんぽ」「ぶんぶんぶん」「ぞうさん」「こいぬのマーチ」		
題材	2拍子・3拍子・4拍子を体感しよう	
リトミックの項目	拍子・即時反応・コミュニケーション	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・曲の変化に応じて2拍子・3拍子・4拍子を感じることができる</li> <li>・即時反応できる</li> <li>・誰とでも活動することができる</li> </ul>	
教材	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「さんぽ」 作詞：中川李枝子 作曲：久石譲 4/4拍子</li> <li>・「ぶんぶんぶん」 日本語詞：村野四郎 ポヘミア民謡 2/4拍子</li> <li>・「ぞうさん」 作詞：まど・みちお 作曲：團伊玖磨 3/4拍子</li> <li>・「こいぬのマーチ」 作詞：久野静夫 作曲：不明 4/4拍子</li> </ul>	
活動内容	指導上の留意点	活動のねらい
1. 「さんぽ」に合わせて四分音符で歩く。	→途中で音楽を止めたり、グリッサンドを入れて向きを変えさせるなど様々な合図を入れる。	→即時反応を行う。
2. 「ぶんぶんぶん」に合わせてそばにいる人と2人組を作り、トン（自分で手拍子・パ（相手と手合わせ）で2拍子を打つ。	→「2人組」という合図で即時に2人組を作らせる。	→2拍子を感じる。
3. 「ぞうさん」に合わせて3人組を作りトン・パ・パをする。	→2人組のときとは違うメンバーで3人組を作らせる。	→3拍子を感じる。
4. 「こいぬのマーチ」に合わせて4人組を作りトン・パ・パ・パをする。	→2人組、3人組のときとは違うメンバーと4人組を作る。	→4拍子を感じる。
5. 「さんぽ」で自由に歩いている途中で、「ぶんぶんぶん」「ぞうさん」「こいぬのマーチ」が聞こえてきたら、それぞれの曲の友達を探して手合わせする。	→各曲でチームになった友達を覚えておくように指示する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>→曲が変わったことに気付く。</li> <li>・集中力を高める。</li> <li>・即時反応力を高める。</li> <li>・コミュニケーション能力を高める。</li> </ul>

#### 4. 実践した指導案の解説

第2節で記載したが、4つの指導案のうち、実践したものは指導案①と指導案④である。この2つについて、解説する。

指導案①は、模唱、模奏、リズム打ちなどを活動の題材としている。小学校学習指導要領の各学年の目標及び内容の、「A表現」の歌唱活動では、「A 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること」とある。「小学校学習指導要領解説音楽編」では、「この事項は聴唱・視唱の能

力を育成するために、範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする内容を示したものである。」とあり、「低学年では、他の人の声を注意深く聴かないで、むやみに大きな声で歌ったり自分勝手な速度で歌ったりする傾向が見られる。また、リズムや音程などがあいまいになっている場合もある。音楽を聴いて演奏する能力は、様々な音楽活動の基礎となるものであり、低学年の実態を踏まえてしっかりと聴唱の能力を育てる必要がある。また、視唱の能力を育成するために、階名で模唱したり暗唱したりする

活動を適宜取り入れるなど、無理のない学習を計画することが望まれる。」と解説されている。

また、「ウ 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと」については、「楽曲にあった表現の能力を育成するために、自分の歌声及び発音に気を付けて歌う内容を示したものである。」とある。

「アイアイ」の活動では、まず指導者が先唱し、児童にその歌い方を真似してもらった。強弱を変えたり、わざと音程を変えて児童がその通りに真似できるかを見たかったのだが、児童は概ね完璧に真似できていた。また、頭声発声が珍しかったのか、その発声方法を真似してきれいな声で歌おうとする児童も多く、指導者の歌い方次第で児童の歌唱力にも影響を与えることができることを実感した。その後、「アイアイ」という歌詞の部分で階名唱で模唱させた。児童が音程と階名を一致させることが出来るよう、指導者も音程にかなり気をつけながらアカペラで歌い、児童も高い「ド」のあたりは難しそうであったが、高い声を出そうとする努力が見られた。

ここまでの活動は、歌唱活動において、児童が指導者の声をしっかり聴いて真似しようとしていたことから、「ア範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること」「ウ 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと」の内容を取り入れることができたと考えている。

声の模唱が終わった後は、リズム打ちの模奏を行った。初めは四分音符で4拍間身体のあちこちを中村が叩き、それを見た後すぐ4拍真似する活動を行った。これは指導者の動きを見ていないと真似することができないが、児童は簡単に真似することができた。その後、手で様々なリズムパターンを打ち、模奏させたり、それをカノンにして行った。

小学校学習指導要領の器楽活動の内容に「ア 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること」とある。その解説は以下のようにされている。

「この事項は、聴奏・視奏の能力を育成するために、範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する内容を示したものである。」「低学年では、範奏を聴いて楽しんで模奏しようとする傾向が見られる。一方、リズムがあいまいだったり、一定の速度が保てなかったりする場合もある。聴奏の能力は、様々な音楽活動の基盤となるものであり、低学年の実態を踏まえてしっかりと聴奏の能力を育てる必要がある。また、視奏の基礎となる能力を養うために、リズム唱、体や楽器によるリズム打ちなどを通して、リズムに対する感覚を十分に身につけるようにすることが望まれ

る。」とある。

リトミック活動では上記の引用部分にあるような体や楽器によるリズム打ちは良く取り入れられる。特に、リズムの模奏やカノンの活動はよく行われる活動である。また、模唱もリトミックの3つの柱である、リズム運動・ソルフェージュ・即興演奏のうちのソルフェージュに当てはまる。このように「アイアイ」1曲の中に、様々なリトミックの要素・目的を入れた指導案を実践することで、身体表現活動を行いながら音楽の勉強をすることができる。

次に指導案④は、リトミックの最もよく行われる活動である「即時反応」を取り入れた拍子の感覚を感じる活動である。「さんぽ」の曲に合わせて歩く活動は、ピアノを止めたり口頭や音で合図を出し、それに合った反応を即時にすることができるためには集中力が必要となる。その活動中に「2人組」という合図ですぐそばにいる友達と2人組を作ってもらおう。その相手と「ぶんぶんぶん」の曲に合わせて2拍子の手合わせを行う。口で「トン・パ」と言わせることで手の動きを音楽に合わせる意識が意識でき、また、速度が速くならないよう声かけをしながら活動する。「ぞうさん」は3拍子なので3人組、「こいぬのマーチ」は4拍子なので4人組を、それぞれ違う相手とグループを作らせる。この活動は曲によって相手が違うため、その相手を覚えておく必要がある。そして、ピアノで弾く曲に合わせて相手を探しその拍子にあった手合わせを行う。この活動では、仲の良い友達とだけではなく、普段話さない友達ともグループを作ることでコミュニケーション能力を高める効用がある。また、音楽をしっかり聴いておかないと相手を探すことができないため、集中力を必要とする。グループの人数で視覚的に拍子を捉えると共に、手合わせにより拍子の違いを感じる事がこの活動の目的である。

このように、指導案を作成するにあたり、小学校学習指導要領から引用した、それぞれの歌唱活動や器楽活動において1年生で身につけるべき能力を補うことが出来るよう考慮して、昨年度行った幼稚園でのリトミックの指導案と内容の違いを出した。

## V 幼稚園教諭によるリトミックの実践

### 1. 幼稚園におけるリトミック活動

昨年の研究において、B幼稚園で中村が幼児にリトミックを実践し、幼稚園教諭がそのリトミック指導を観察した。その後、2013年8月に同じB幼稚園を含む複数の幼稚園教諭対象にリトミックの講習会を行った。その際、「うたとあそび」（鹿兒島市私立幼稚園協会編）に掲載されている幼児

曲や、アニメの主題歌などを使用して作成したリトミックの指導案を配布し、解説・実践を行った。今回は、その講習会を受けたB幼稚園に協力いただき、幼稚園教諭がリトミックをどのように保育に取り入れているか観察と質問紙

調査を行った。

リトミック活動の観察は、年中組で行った。リズム室にて30分程度のリトミック活動が行われた。プログラムは以下の通りである。(表3)

表3. B幼稚園年中組リトミックプログラム

活動内容	ねらい	幼児の反応
1. 「さんぽ」に合わせて歩く・ストップ・高音の合図でジャンプ・グリッサンドで方向転換・低音でしゃがむ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・即時反応。</li> <li>・音の高低の判断。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアノが止まると即座に動きが止まる。音の高低もきちんと聞き分け、その合図にあった行動を取ることができる。</li> <li>・音楽の変化に対する反応がとても早い。</li> </ul>
2. リズムの模倣。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者の叩いたリズムを真似ることが出来る。</li> <li>・集中力を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児は難しいリズムは叩けなくても、少しでも上手く真似しようと集中して指導者を見て、音を聴いている様子がみられた。</li> </ul>
3. 「どんないろがすき」に合わせてスキップ。指導者が色の名前を言った時にその色のカラーボードを探してそこに行く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・即時反応。</li> <li>・聴く力、集中力を高める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しんでスキップしながらも指導者が何の色を言うか、耳を澄ましている様子がよく伝わってくる。</li> </ul>
4. 「夢をかなえてドラえもん」の拍に合わせてボール回し。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拍を感じる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・拍に合わせて「ハイ・ハイ」と口で言いながら隣の人にボールを渡すことで、しっかりと拍を感じることができていた。</li> </ul>
5. 森にさんぽに行くというテーマで、途中に水たまりがあったらジャンプ、大きな木を避けるために方向転換など音楽とストーリーを組み合わせた内容。途中でかたつむりやアイアイ、かえるに出会ったり、転んで怪我をしたので悲しい気分、ありに刺されて怒った気分などの感情を身体表現させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・即時反応。</li> <li>・想像力を高める。</li> <li>・音楽の表情にあった動きができる。</li> <li>・音の強弱、高低の違いを表現する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「かたつむり」の曲が聞こえてきたら幼児自身がかたつむりになり腹ばいになって動いたり、「かえるのうた」を指導者が通常の音域、高い音域、低い音域で引き分けるとそれに合わせ幼児の動きも大きくなったり小さくなったりした。</li> <li>・悲しい曲がきこえると下を向きゆっくり元気なく歩き、激しい曲が聞こえると足をドンドン踏みならして歩くなど音楽にあった表現ができていた。</li> </ul>





写真3. B幼稚園のリトミック風景①



写真4. B幼稚園のリトミック風景②

プログラムの1から3は、中村が講習会で実践したものであったが、プログラム4は担任教諭自身で作成したものであった。森をさんぼする途中で様々な動物に会い、「楽しい」、「綺麗」、「悲しい」、「怒り」などの感情を教諭が音楽で表現すると、幼児は何の動きの指示がなくともその音楽にあった身体表現を全身で行うことができていた。B幼稚園では普段から少しずつ保育にリトミックを取り入れているということで、それを総合的につなげた物が今回のプログラムとなったものである。プログラム中の幼児は、興味関心が途切れることなく広いリズム室いっぱいに動き回っていた。そして、幼児は教諭が意図しているであろう動きを自分たちの判断で行っており、教諭と幼児の信頼関係が伺える内容であった。

教諭は、「うたとあそび」の中の曲を使いながらも、多くは即興的に音楽を弾いており、さらに幼児の動きをしっかりと見ながらピアノを弾いていた。このプログラムは、ピアノが得意な教諭だからこそできる活動内容であったが、ピアノ伴奏を簡易化することにより、他の教諭でも十分に可能な内容となる可能性がある。今後も引き続き他のクラスの教諭にも協力してもらい、ピアノに苦手意識がある教諭でも可能なプログラムを開発していきたい。

## 2. B幼稚園における質問紙調査

今回は1人の教諭のリトミック指導を観察し、B幼稚園の全員の担任教諭に質問紙調査を行った。

〈質問1〉8月に講習会を受けられて、これまでに何回ほどリトミックを指導されましたか。(図4)

6名中、週に1度取り入れている教諭が1名で、これまでに、2回から3回の教諭が4名であった。

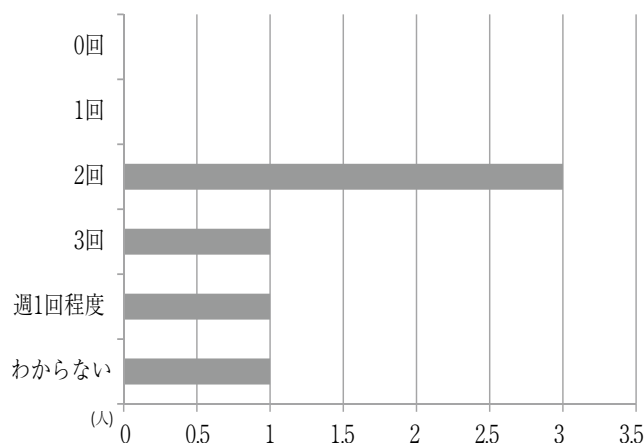


図4. これまでにリトミックを指導した回数

〈質問2〉どのような活動を取り入れられましたか。

リズム打ちや、「ぞうさん」などの歌に合わせて動く活動、「さんぼ」に合わせてストップしたりジャンプしたりする活動など、以前の講習会で提示した活動を取り入れている様子が見え、回答が記載されていた。(図5)

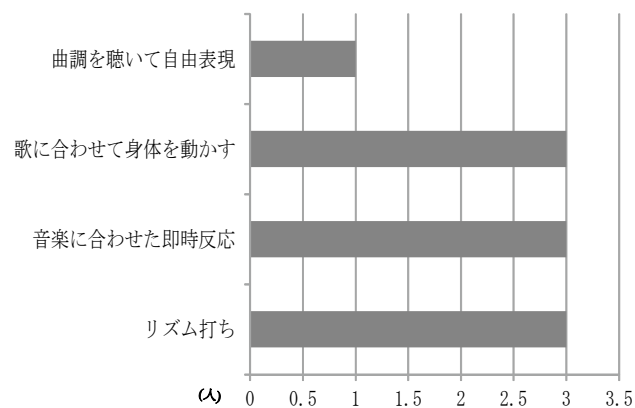


図5. 保育で取り入れたリトミックの内容 (複数回答可)

〈質問3〉指導されてみて、難しいと感じとことはどういったところですか。

この質問に対しては、やはり「ピアノが苦手なのでなるべくピアノを使わない活動を行う（リズム打ちなど）」という回答の教諭が3名おり、また、「常にピアノの場所がいなければならないので、教師が一緒に行ったり見本があまり見せられない」、「リズム打ちなどは個人差があり、どの程度の物を取り入れたら良いかが難しい」という意見があった。プログラム中での指導者の動作については、さらに考察し、指導案の展開を実施する教諭が、さらにわかりやすく記述する必要がある。

〈質問4〉子どもたちの反応はいかがですか。

この質問に対しては、全てが肯定的な意見であり、「楽しそう」「反応がよくまたしたいと喜んで楽しく行っていた」「とても笑顔になりピアノの音に集中していた」といった答えが得られた。

〈質問5〉今後もこのような活動を子どもたちとしたいと思いませんか。

この質問に対しては6名全員が「思う」と答えてくれた。

〈質問6〉もっとリトミックの実践方法について知りたいと思いませんか。

この質問に対しては、6名中5名が「思う」、1名が「あまり思わない」という回答であった。

質問5・6においては、リトミックを取り入れた活動に対して肯定的な意見が多く、保育において有意義な活動であると捉えていることがわかった。

#### IV. 考察

リトミック教育の目的は、学んだ後、生徒たちが、「知っています」ではなく、「やりました」といってそのあと、自分を表現したいという欲求を自分の内に生み出すようにすることである<sup>1)</sup>。例えば2拍子、3拍子、4拍子という拍子の違いがあることを教科書を見て学ぶだけではなく、身体全体で体感することで記憶に残り、あとから机上で学んだ際にあとき体験したことだと思えるようにすることがリトミックの大きな目的となっている。この考え方は特に、身体表現活動であるリトミックを小学校の音楽の授業に取り入れる意義として挙げられるのではないだろうか。

小学1年生の3クラスでリトミックの授業を実施したが、まだ児童にとって身体表現を行うことに抵抗はないようだった。学年が上がるにつれて恥ずかしさが出てきて自分の思ったような表現ができなくなるだろう。表現することに抵抗がない時期から様々な活動を取り入れることが重要

となってくるであろうが、小学校低学年の音楽の授業を音楽専科の教諭が受け持つことは少ない。小学校の学習指導要領に沿って今回の音楽の授業の指導案を作成してみたが、指導要領には身体表現を取り入れるように記載されていても、教科書通りに指導案を作成するとどうしてもピアノや歌がメインとなってしまう。教育芸術社のホームページに掲載されている「年間学習指導計画」によると、例えば「はくにのってリズムをうとう」という題材で「ぶんぶんぶん」や「しろくまのジェンカ」など5曲が取り上げられているが、学習内容はどれも「歌ったり音楽に合わせて体を動かすことで、リズムを感じる」と記載されており、椅子に座ったままリズムを身体で感じるのか、教室全体を使って全身でリズムを感じるのかはそれぞれの教諭に任されてくる。そうであれば、今回のように身体表現のみの授業を行ってもよいのではないだろうか。そのプログラムを小学校教諭が考えることはもしかしたら難しいことかもしれないが、中村が専門家として、その指導案を様々なパターンで作成し、提供することにより現場の教諭に実践してもらえよう活動は今後行っていきたい。そして、次回は教諭自身にそのプログラムを実践をお願いし、そのプログラムの問題点などを検証していきたい。

また、幼稚園においてはリトミックについてこれまで全く知らなかった幼稚園教諭が講習会をきっかけに、数回でもリトミックを取り入れてくれたことは今後の活動内容の広がりを感じさせる。もっとリトミックの内容を知りたい、簡単な曲で取り入れる方法を知りたいという意見を今後に生かし、汎用性を考えたプログラム開発をしていかねばならない。

#### 謝辞

本稿を投稿するにあたり、研究にご協力いただいたA小学校及びB幼稚園の関係者に感謝したい。なお、個人情報保護の観点から小学校及び幼稚園名は掲載しない。

#### 註

1) エミール・ジャック＝ダルクローズ著「リズムと音楽と教育」(山本昌男訳)全音楽譜出版社2003、p.77

#### 参考・引用文献

・鈴木邦明「小1プロブレムが起こりにくい授業方法の工夫」国立青少年教育振興機構研究紀要 第10号 2010・時得紀子・信谷準「身体表現活動を取り入れた拍感の体得をめざす試み—小学校低学年の音楽科授業を通して—」教育実践研究 第20集 27-36、2010

- ・日本教材システム編集部「ひと目でわかる2色刷り 小学校学習指導要領 新旧比較対照表」日本教材システム株式会社、2008
- ・堀内詩子「小学校音楽科教育と幼児教育との連続性の検討—小学校学習指導要領（音楽）の比較分析から—」心理社会的支援研究 第2集 55-66, 2011
- ・松元直子「公立小学校におけるリトミック指導の意義と可能性」『リトミック実践の現在』日本ダルクローズ音楽教育学会編 開成出版、2008
- ・文部科学省「小学校学習指導要領 平成20年3月告示」東京書籍 2008
- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説 音楽編」教育芸術社 2008
- ・安彦忠彦監修 坪能由紀子・伊藤義博編著「小学校学習指導要領の解説と展開 Q&A と授業改善のポイント・展開例」教育出版、2008

(平成26年1月10日 受理)